

僕の自慢の花妖怪(およめさん)

『向日葵』

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

「……浮気したら、殺すから」

——突然だが僕のお嫁さんは、人間ではない。信じられないと思うだろうが、摩訶不思議なことは他にもない僕——『天ヶ崎（あまがさき） 隆斗（たかと）』のこの目でしかと見たし、経験もした。

けれど彼女は、僕が会社の女性後輩と話してるだけで嫉妬するし、エロ本を持つてるだけで激怒するし、楽しい時には共に笑い、悲しい時には共に泣く……そんな、人間と何も変わらない、魅力的な可愛い——僕の自慢の花妖怪（およめさん）なんです。

これはそんな彼女と僕の、甘々しくも危機殺伐とした、笑いあり涙ありの結婚生活（ものがたり）。

目次

僕の自慢の花妖怪（およめさん）	1
実はエロい僕の花妖怪（およめさん）	6

僕の自慢の花妖怪（およめさん）

「……浮気したら、殺すから」

「あはは。僕はもう、幽香さん。とつくの昔に、あなた以外は眼中にありませんよ」

「……ばか」

——そう言って口づけを交わした僕の最愛の恋人……いや、今日から最愛の『妻』になる『風見（かざみ）幽香（ゆうか）』さんは、最高に可愛く……そしてこの世の何よりも綺麗だった。

☆☆☆

「——浮気したわね、殺すわ!!」

「ちよつ、それはいくらなんでも理不尽じゃ——」問答無用よ、このばかあつ!!」「——ぐはあああつ!!」

……全ての始まりは、あの場所。たくさん向日葵が咲いていたその畑で、僕と彼女は出会いを果たした。

両親の仕事の都合上、田舎へと引っ越すことになった僕こと『天ヶ崎（あまがさき）隆斗（たかと）』は、それはもう憂鬱だった。何の因果で都会から田舎に引っ越さなければならぬのか。あの時の若い

僕は、そればかりが不満だった。

それもそのはず。都会と田舎、若者なら誰がどう見ても都会を取るに決まっている。都会の方が何かと便利だし、退屈もしない、地元だったし友達もいっぱいいた。だから、不満しかなかった。

だからこそ、田舎に引越してきて初日、家出をしてしまったのは、仕方なかったことなのかもしれない。何より反抗期だったということもある。

……まあ今になって思えば、なんて子供だったんだなあ、と後悔もしてる。

でもーそれがなければ、今の僕はなく。そして、幽香さんにも出会ってなく。

「ぐはっ……！ちよ、まって、幽香さー痛い痛い!!痛いからー!」

「さて、早速浮気をしたあなたを私は殺してやりたいと思っただけれど……隆斗、あなたはどう思う?」

「ー現在進行形でっ!君につ、殺されかけておりますがぁ!」

ーそして、こんな命の危機に直面することはなかったであろう。

僕の上に跨り、誰もが見惚れるような笑顔を幽香さんは浮かべながらー容赦なくその拳を僕に向かって振り下ろしてくる。

ゴスツ、ゴスツ。何度も、何度も。ええ、すごく痛いですが、ええ、それはそれはとても。

「ああ、私は悲しいわ、隆斗」

「だどっ、思うっ、ならっ!そのっ、拳をつ!止めてくださいお願いしますっすう!!」

馬乗り状態で問答無用に殴り続けてくる嫁ーそれが、僕の妻であることの悲しい現実を受け止められません。なまじ人間じゃない分、その拳の威力は尋常ではない。

っっていうか、幽香さん。浮かべている顔は確かに笑顔のはずなのに、目が全く笑っていないのはなぜなんだ。とても怖いよ。

……まあ原因は、その『片手に持つてるやつ』なんだろうけども。
「いやあ、これには私も一杯食わされたわ。まさか浮気相手が、こんな紙だったなんてね」

僕をタコ殴りにしていた拳を一旦止めて、これ見よがしにその片手に持っている本……所謂エロ本をヒラヒラと弄ぶ幽香さん。

馬乗りにされてタコ殴りにされた挙句、その行動に男としての尊厳がどんどん薄れていってる気がするが……しかし、動きが止まった今——反論するなら、ここしかない。

「待つてくれ幽香さん！その本は友人が持つてきてここに勝手に置いていっただけの代物で、その、とにかく誤解です！」

「この本は一週間前にはなかったわ。そしてこの一週間の間、あなたと私以外の人はこの部屋に上がっていない。この意味、わかるわよね？……それで、なんて言ったのかしら？——ああ、五回 death (デス)？そう、五回死にたいのね？ふふつ、仕方ないわねえ」

——あ、これあかんやつや。

本を無造作に投げ捨て、ポキポキつ、と軽快に指を鳴らしている彼女を前に、僕はそう悟ってしまった。今の僕には幽香さん、君が最愛の妻ではなく災厄の死神に見えてしまう。

しかし、だ。考えてみてもほしいのだ。僕は人間の男であり、故人並みの性欲は持つ。そのため、そういったものを買ってしまうのは、仕方のないことじゃないか——あ、幽香さん。無言でビンタはやめてくれませんか。

「ばかっ！ばかっ!!——この浮気者っ!!」

「ぐはっ！ぐえっ！ちよ、ストップストップ！」

あははこいつー、全然効かないぞー、みたいなノリで済ませられるような雰囲気だろうが、僕は騙されれないぞ。何せ可愛い言葉と共に繰り出されているのは、一撃一撃が紛れもない死の強打だ。

だから僕の必死のストップ発言も冗談なんかではなく、マジなんだ。真剣と書いてマジなんだよ、幽香さん。

「私は浮気者に罰を与えてるだけよ、わかる？マジと呼んで真剣と書くのよ、隆斗」

「真剣に僕を殺しに来てるってことですかねえ!？」

「大丈夫、流石に私もそこまでしないわ。次に目が覚めた時、あなたの頭の中は私でいっぱいになるくらいにしか殴らないから、安心なさい」

「全然安心できない!？」

「どこの世界に嫁に魔改造される夫がいるんだ……と思ったが、現在進行形でいましたねここに。はい、余計に安心ができません。

……こうなれば、致し方ない。あれをやるしかないようだ。

「――幽香さん、お願いだ。僕の話聞いてほしい」

「っ！な、何よ、今更!」

僕の真剣みを帯びた雰囲気、殴っていた手を止め、おどおどしだす幽香さん。心なしか、顔も赤い気がするが、何故だろうか。……まあ、今は気にしないでもいいか。それよりも、大切なことを彼女に伝えなければいけないのだから。

――喰らえ、僕の十八番!

「それは、幽香さんを喜ばせるためのものなんだ!」

「……………はい？私を喜ばせるため？あのねえ、隆斗。あなた、この期に及んでなにをいつ、て――っ!？な、なっ、ななっ!？あ、あな、あなたっ…………!？」

僕の突然の言葉に、きよとん、となる幽香さんだったが…………ふっ、その意味を察したのだろう。瞬時に顔を赤くして、声にならない声を上げようとする。その姿を見て、勝利を確信する僕。

そう、これが僕の十八番…………幽香さんを辱める行為だ。普段はクルぶっている幽香さんだが、実は彼女、結構ムツツリだったりする。「ねえ、幽香さん。僕は知ってるよ?実はその本に対して怒ってたのも――僕を満足させてあげるのは、私だけだから、って対抗意識を

持っちゃったからなんだよね?」

「な、ななっ!て、てきちよーなことをっ……!?!」

凶星つかれて焦りすぎでしょ、幽香さん。声が上がってますよ。……そんな幽香さんが最高に可愛いのだが、まあそれは当たり前のことか。

まあそもそも、幽香さんがムツツリだと何故僕が知っているか、なのだが。これもわかりやすい。わかりやすすぎて可愛すぎる。

「……だって幽香さん、普段はあんなに強気でDSなのに、ベットの上下では弱気で、ドえー!」それ以上言うなあああ!!」ーぎゅぶる!?!」

言い終える前に馬乗りの幽香さんから有無を言わさない一撃が飛んできた。……あ、これは飛ぶヤツです、主に意識的なものが。

今までの手加減したのではなく、渾身の力を込めての右ストレートを喰らったことにより遠のく意識の中……赤らめた顔で息を荒らげる幽香さんを見て、僕が最後に思ったのは、

ーこれからも末永く宜しくお願いします……僕の自慢の花妖怪(およめさん)、であった。

実はエロい僕の花妖怪（およめさん）

「……隆斗。私が言いたいこと、何かわかる？」

「……いいえ、わかりませーあ、痛い幽香さん。無言でビンタはちよつと」

とぼけようとしたら、幽香さんに無言でビンタされた。毎度のことながら普通に痛いです。あといきなり来るからビツクリしちやいます。

「ふふっ。ねえ……隆斗？」

ああ、幽香さん。今日もあなたはお綺麗ですね、本当に。特にその誰をも魅了させてしまう程の満面の笑みが。

「ーこれ、なあに？」

「……言い訳をさせてくださいませ」

ああ、幽香さん。あなたは本当に、お綺麗でございます。特にその、満面の笑みだけど目が全く笑っていないお顔なんて芸術です。

「いやあ、私も驚いたわ。買い物をしてたら、その帰り道に私の旦那によく似た人を見かけて追っかけてみれば……面白いものが撮れちゃった」

わざとらしくそう言った幽香さんが懐から取り出した携帯の画面に写っていたのは、会社の飲み会で酔っ払った僕と、その酔っ払った僕に付き纏われているように見えない……いえ、付き纏われておりますね。会社の後輩、二十三歳独身の女性である。

……さて、どうしたものか。完全に言い逃れができない。誰がどう見ても、幽香さんの持っている携帯に写っているその写真は、僕が女性後輩にセクハラしているようにしか見えないのだから。

「隆斗。あなたの酒癖の悪さは、他でもないこの私が一番よく知っているわ」

だからこそ、幽香さんのその言葉に、僕は目を丸くする。

何時もならここいらで問答無用とか言って殴ってくるのに、何故だか許されそうな雰囲気になってきたからだ。何か裏があるのではと

勘ぐってしまう程だが……しかし、今回の僕の酒癖の悪さを容認してくれるなら、ここは甘んじて受け入れよう。

「ありがとう、幽香さん！これを機に、お酒は誘われても断るようになー」「だから」ーん？」

「だから私は、あなたを許すけどーこの女を半殺しにするわ」

前言撤回、全然許されてなかった。

このままでは、明日の新聞の記事に僕の会社の名前と後輩の顔写真が貼られてしまうだろう。

だってこの人ーいや人ではないけどー半殺しとか言ってるけど絶対殺すつもりだから。目線が台所にいつてるから。包丁持ち出す気満々だから。

そんな僕のハラハラした様子を察してくれたのか、幽香さんはハツとした表情をすると、

「ふふっ、冗談よ、冗談。安心なさい。ほんとはー全殺しにする予定だから」

「やっぱり殺しますよねって言うか全然安心できないよ!?!」

などと笑顔のまま死刑宣告をしてきた。……どうして君の安心しとてという言葉にはここまで信憑性が無いのだろうか。いや、そもそも全殺しってなに？もしかしなくて一族郎党も？

「ー友人関係もよ」

「遠回しに僕も殺すことになっておりませんか!?!」

後輩の友人⇨僕も。やばい、全殺しの中に僕も混ざっていたとな。まさしく『全殺し』だ。この人が本気になればそれも可能な気がしてきたて怖い。

……しかし、ここで僕が彼女の説得を諦めてはそれこそ全てが終わってしまう。僕だけならまだしも、ほかの人まで被害に合う……それだけは何としても避けたい。いや、避けなければならぬんだ。

「幽香さん、その子を許してあげー」その子？へえ、随分仲良さげな言い方ね？「ーその私めの後輩様をどうにか許してあげてくださいお願い致しますう!!」

だから笑顔が怖いんだってば幽香さん。割と真面目に。

「ふふっ、隆斗がそこまで言うなら……選びなさい、選択肢を」

などと幽香さんの笑顔と言えない笑顔に気圧されていると、そんな提案が彼女の口から飛んできた。

「ーしかし、これは僥倖。」

流石の幽香さんも、僕が死ぬような、もとい重傷を負うような提案はしないはずだ。恐らく、ビンタ三桁コースとか馬乗りタコ殴りコースとかのはず。……いや、十分に痛いんだけど、それで丸く収まるなら、僕も幾分か我慢するさ。

「全身丸焼きコースと打首獄門コース……どっちがいい？」

全身丸焼きコースと打首獄門コースの二択、ときたか。ふむ、どうするか。

まず丸焼きコースは、家のゴミー主に僕の秘蔵コレクションをかき集めて火をつけ、そこに棒に括りつけた僕をゆつくりと時間をかけて全身焼いていくコース、ね。うーん、却下だ。

次に打首獄門コースだが、これは言わずもがな、家にある包丁と幽香さんの腕力があればこそ可能な首の両断を僕に行った後、玄関に勧誘お断りの張り紙と共にぶら下げておく、と。うーん、却下だ。

「ーって両方僕死んでますよね?!しかも二択目酷すぎないかな?!いや効果は絶大だろうけどさ!!」

「大丈夫よ、隆斗。この程度、不老不死だったあの連中なら何事もなくやってのけるから」

「僕をそんな摩訶不思議な連中と一緒にジャンルにしないでくれるかなあ!?!」

僕は至って普通の人間なんです。あなた達みたいな人外ではないんです、至って普通のサラリーマンなんです。

まあ、流石の幽香さんも冗談だったのだろう。仕方ないわねえ、ため息を一つ吐くと、また別の提案を持ち出してきた。

「両爪生剥ぎコースと磔鞭打ちコース……どっちがいい？」

「今度は随分エグいねえ!?!」

なんでそんな、文字だけで痛いって思わせるような発言ができるんだい君は。しかも実の夫に対して。

「愛してるからよ」

「そんな愛はいやだああ！うわああああ！」

僕、ついに発狂。みつともないとかそんな概念は関係なく、ただただ嗚咽をあげながらその場に泣き崩れた。……流石にこれには幽香さんもたじろいでいるようだ。

「こ、こら、泣き止みなさい隆斗……冗談だから。半分」

そこはせめて全部にしてほしかった。半分は本気だったってことでしょ？……え？打首獄門は流石に冗談の方だったんだよね？ね？

「隆斗、そんなに震えた顔でこつちを見上げないで頂戴……打首獄門にしたくなるわ」

「まさかの本気の方だったあ!？」

嫁の夫への罰に打首獄門の刑がある現実には、僕は悲しみで打ちひしがれてしまった。

そもそも打首獄門って、君はいつの時代から生きてたのさ。いや、昔本人に話を話聞いた限りじゃ、平安時代から生きてたらしい……そりゃ知ってるよね、打首獄門とか。

「二度やってみたかったのよね、打首獄門」

てりや、などという可愛い声とは裏腹に、凄まじいスピードで繰り出される幽香さんの手刀を見ると、ゾツとしてしまう。ねえ、それは何の素振り？何のための素振りなの？

「……話がズレちゃったわね。じゃあ、隆斗。私は今から野暮用があるから、出掛けるわ。あなたは帰ってきてきてちゃんとお仕置きしてあげー何よ隆斗、その『マジ勘弁してください』って続けるような泣き顔は。そんな顔されても、興奮するだけよ？」

「……っ！」

くっ、僕だつて本当ならこんな顔したくないし、屈辱的さ。誰得だよ僕の続けるような泣き顔なんて。けれど、この状況じゃこうでもしないと、君は。

「……っ!!」

「……………はあ、まったく。その顔、ダメね。やつぱり我慢出来ないわ」

「ー君は、その気になってくれないだろ、ちくしょう。」

胸ぐらを掴まれ、ベッドに軽く放り投げられる。本当に、なんて腕力だい、幽香さん。

そのまま有無を言わず、ベッドの上で仰向けになっている僕に覆い被さるように跨り、幽香さんは僕の唇を奪ってくる。ー乱暴に、暴力的に。まるで、僕の全てを支配するかののように、舌を艶めかしく這わせてくる。

「ーんっ、むっ」

くそう、なるべくこの手は使いたくなかったんだ。恥ずかしいし屈辱的だし、されるがままに攻められるから。

普段なら僕が主導権を握っているけど、幽香さんから攻めてきた時は話は別。攻められるとあんなに弱いのが嘘のように、幽香さんはその独占欲の強さを表したかのような激しい攻めをしてくる。

「ーあっ、はっ」

数十秒の間僕の唇を塞いでいた幽香さんが、顔を離れた。僕の口と幽香さんの口の中で混じりあつた唾液が、つう、と糸を引く。

僕を妖しく見る幽香さんの顔はーああ、完全に、スイッチが入つた時の顔だ。

「覚悟は出来てるわよね？私を『誘った』って言うことは……………そういうことでしょ？」

はあ、と色っぽく息を吐きながら、幽香さんはそう言った。

そう、僕は幽香さんを誘った。つまりー『君の好きにしている』、ということだ。だから僕は、されるがままになる。どんなに辱められようと、僕は抗うことができない。

ー幽香さんが満足するまで、僕は彼女に付き合わなければならぬのだ。

……………けど、だからこそ、効果があるんだ。

「そ、そういうことだから……幽香さん？ね？」

「……まあ、いいわ。あなたの泣き顔に免じて、今日『も』許してあげるーんっ」

言つて、また僕の唇を無理やり奪う。激しく、蕩けそうなキス。

しかし言質は取った。これで彼女が後輩を襲うようなことはないだろう。そして、僕に危害を加えることも。

……しかし。

「ーふふっ、夜はまだまだこれからよ、隆斗？」

このとてつもなく可愛くて、それでいて実はエロい僕の花妖怪（およめさん）の攻めに対して、明日の出勤までに体が持ち堪えているのだろうか……それだけが気がかりだ。